

〈書 評〉

加藤 明著 『新学習指導要領をひもとく』

(文溪堂出版, 2019 年, 159 頁, 1,800 円+税)  
金子 美里 (関西福祉大学)

本書の目的は, 新学習指導要領の全面実施 (小学校では 2020 年度から, 中学校では 2021 年度から) を前に, 新学習指導要領について確かな理解を深めることにある。

これまでの学習指導要領が「何を教えるか」(内容)を重視していたのに対し, 新学習指導要領では, 「何ができるようになるか」(能力)を明確化している。このことは, 「予測困難な時代への対応」「持続可能な社会を目指すこと」への認識に基づいており, かつてない危機感をもって, 子どもたちの理解の質を高め確かな学力を育成する「社会に開かれた教育課程」の実現をめざすものとして示されている。今回の改定では, 幼児教育から高等学校教育まで一貫した 3 つの資質・能力が目標・評価の観点として掲げられた。

著者は, 3 つの資質能力について, 次のように示している。

「生きて働く知識・技能の習得」には, 「活用できる知識・技能を持たなければならない」。また, 「未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力等の育成」には, 「ルーティンではない状況においても問題を解決する能力の育成」「…等においては, 粘り強くがんばる力(コーピング)といった非認知的能力の育成」も必要ととらえるべきであるとしている。さらに, 「学びを人生や社会に生かそうとする学びに向かう力・人間性等の涵養」については, 「自尊感情や自分の人生及び社会に対する積極的で肯定的な見方・考え方を基盤に実現するもの」としている。これらを各教科等の内容に即して明確化

し, 「何を学ぶか」「どのように学ぶか」「何ができるようになるか」の一連の流れとして捉えた「目標と指導と評価の一体化(PDCA サイクル)」が重要であるとしている。

本書の構成の概略は, 以下の通りである。

プロローグ 「2020 年から学校教育は変わります。」

第 1 章 「何ができるようになればいいのか」  
～何がみにつけばいいのか～

第 2 章 「何を学ぶか」  
～教科内容の効果的な教材化～

第 3 章 「どのように学ぶか」  
～主体的・対話的で深い学びを実現するには～

第 4 章 「評価を生かした授業とは」  
～新しい時代に求められる教師の資質・能力～

エピローグ 「やさしいことばがやさしい心を育てる。」

著者は, かねてから「開く」授業を提唱(「著書『『開く』授業の創造による授業改革からカリキュラム・マネジメントによる学校改革へーアクティブラーニングを超える授業の創造と小中一貫の教育の方法ー文溪堂)している。第 1 章では, 新しい世界を開きながら, 自らの可能性を開く授業となるには, 能力を系統的に育てるための作業仮説を立て, 評価によって作業仮説を修正し, 作業単元から資料単元へ仕上げ, カリキュラム開発を図ることが重要だとしてい

る。そして、これを学校単位とする共同作業の中で行うには、教師間のコミュニケーション力とコラボレーション力が求められるとしている。

第2章では、「何を学ぶか」と題し、目指す子どもの姿（目標）を実現するための「見方・考え方」について、問題解決の過程（論理的・批判的思考や教科の見方・考え方）を重視した具体的な授業展開のあり方について触れている。「生きて働く知識・技能の習得」には、問題解決によって活用する力を育てる「活用題」が必要であるとし、それは、基礎的・基本的な知識・技能の理解や習得をより確実にするものとしている。その実現のためには、適切な質と量の「適用題」、「練習題」が必要であるとしている。また、「活用題」に関する「もし〜だったら」という仮定的思考での出題においては、「未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力等」の育成につながるとしている。さらに、「まなびに向かう力」を育てることに触れ、考える力や粘り強く取り組む力を伸ばすことの大切さ、子どもの手応えを感じ取り、褒めることによって自尊心と知的好奇心を育てることが求められるとしている。

第3章では、何を「どのように学ぶか」をさらに掘り下げている。ここでは、「主体的・対話的で深い学び（アクティブラーニング）」を教育方法の視点で再定義し、具体的に示されている。

「主体的」について筆者は、自分ごとをどう高め、深めていくかを次のように段階的に示した。「おもしろそうだ」という情意の高まりを、教師は「ゆさぶり」によって意識化させ、視点を捉えて褒めることにより「ますます、だんだんおもしろくなってきた」とさらに気持ちが高まる。学びが意識化・自覚化・個性化されるこ

とで「終わってからもやってみたい」との、生きがいやこだわりへとつながる。このことが「自分ごとの深まり」につながるとして示されている。

「対話的」は、3つの対話（友達・書物・自分自身）として示されている。学び合い、高まり合いといった知的な協働作業、知的コラボレーションにおいて、どこまで子どもたちに任せ背伸びをさせて頑張らせるのかは、教師の方向付けが前提条件となるとし、教材に内在した価値を「開く」ことによって、高まり合う手ごたえを味わわせることが、「対話的に学ぶ」ことであると示している。

「深い学び」については、「主体的・対話的」な学びの成果と相まって実感、納得、感動等を伴う手応えのある学びにプラスアルファされるものとしている。また、学習の振り返りによって、より優れた解決や関連付けのあり方を構築するAI的な不断の認知構造の再構造化、統合化を含むものとしている。

また、こうした中での「交流の場」は、異質を受け入れて様々な意見を出し合い、同時に、論理的・批判的思考力を育成する場として有効であるとする。収束的な思考と拡散的な思考により個性の出会いによる表現力や理解力（受容力）を育て、人間性を涵養する場であると示されている。

第4章では、「評価を生かした授業とは」と題し、授業の結果である「子どもたちの育ち」に視点を置くことで、評価を生かした授業のあり方を再認識する内容が示されている。評価から見た優れた授業の条件として、次の3つが示されている。

一つ目に、成果が上がっているか確かめること。その際に、子どもは教師が期待するほど分かっていないものだということを前提とし、フィードバックは、短いサイクル（適用題）と

長いサイクル（形成的テスト）のものを併用して成果を見る。成果次第では直ちに教え直しをし、軌道修正を図る。つまり、指導の成果を確かめるために評価を行い、その評価に基づいてその後の指導を行うことが大切であると述べている。

二つ目に、成果の内容は十分かということ。分かる、できるといった結果だけでなく、ものの見方・考え方、感じ方、学びに向かう力といった成果も併せて実現しなければならないとしている。教師は、「学び」だけでなく「育ち」にも目を向けることで、非認知能力の成果等もつくり出さなければならない。「自力解決の力」や「協働による学び合い・高まり合う力」「探究の力」困難から逃げずにがんばる力にも視点をのいた評価をすることで、学ぶ手応えや自信、肯定的な自己概念、バランスの取れた自尊感情など、「育ち」としての成果をつくりださなければならないと示されている。

三つ目に、一人一人の成果を返してほめること。テストで評価することができない部分（非認知的な能力）についても、これまでと比べての変容や成長を見取り、具体的に取り上げてピンポイントで返すことが大切であるとしている。

本書では、新学習指導要領を具体的な授業展開と照らし合わせ、読者が実践しやすいよう指導のポイントが整理されている。また、「思考を活性化させるためのマイノート」の具体例や、「ピンポイントレッスン」（例：「宿題忘れは減らせます！」）など、身近な問題への改善策が各所に書かれており、明日からの実践に生かせる内容となっている。

小学校教諭を目指す大学生や大学院生、自身の実践やその成果について振り返りたいとする現場の教員にとって、大変有為な一冊であると言える。